

テーマ	① 海外からの編入時における取得単位の認定について
参加者(学校名)	<ul style="list-style-type: none"> ・守谷 たつみ 様（わせがく高等学校） ・村上 聡子 様（富士見中学高等学校） ・竹鼻 志乃 様（豊島岡学園中学校高等学校） ・清水 隆 様（大阪国際大和田中学校高等学校）
モデレータ/記録	JOES 教育相談員 中山 順一
<p><協議メモ></p> <p>はじめに各校の帰国生教育の取り組みなどについてご紹介いただいた。</p> <p>1) 中学校の卒業資格</p> <p>A 校から、中学校の卒業資格の確認が難しい例を挙げられ、どのような書類でどのように資格を認定するかというご質問があった。これに対して、本人の学力が入学にふさわしいと校長が判断すれば経歴を問題にしなくても良いのではないかというご意見もあったが、やはり根拠が欲しいとのこと。また、B 校からはG9在学中に急に帰国が決まった生徒について、中学3年生で編入受け入れをして卒業資格を与えたうえで高校に入学していただくというご説明があった。</p> <p>2) 高校編入の際の単位認定</p> <p>C 校から、海外の成績はそのまま提出し、在学中の取得単位のみ認定すればよいとお話があり、A 校からは通信制、単位制の高校の例をお話いただいた。さらに C 校からは3年以内の転出戻りの生徒は学期途中でも受け入れた事例についてもご紹介いただいた。JOES 相談員からは、高校3年生を受け入れる学校は少なく困っているご家庭があることをお話しした。</p> <p>3) 日本語や日本の教育にサポートが必要な生徒への対応等</p> <p>B 校より、日本語や日本の教育に十分追いついていない生徒の対応と高度の英語力のある生徒への対応について質問があった。日本語の追いつきについての例は JOES 相談員からお話しし、他校からは高度の英語力のある生徒への対応として放課後ネイティブ教師のレッスンの例や留学センターでの取り組みについてご紹介があった。</p> <p>4) 弊財団への要望</p> <p>参加校より以下についてご要望をいただいた。今後、担当チームとも連携のうえ、こうしたご要望にお応えできるように検討したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①海外のすべての学校は無理としても現地校について何か情報が欲しい。一覧とか検索できるとありがたい。 ②学校便覧の大学欄に、帰国後何年経過ならどの大学が受けられるかというような逆引きが欲しい。 	

5) 最後に

参加校からは「高校入試を停止するので高校編入の受け入れを検討したいので、今回参考になった」「関西で情報が少ないのでこのような機会があってよかった」とお言葉をいただいた。

JOES 相談員からはこれを機会に一層会員校の皆様との交流を深め、教育相談の高度化を図りたいのでよろしくお願ひしたいと申し上げて分科会を終了した。

以 上

2021年度 学校会員連絡協議会（オンライン開催） 分科会・グループ協議メモ

テーマ	③-1/③-2 オンライン入試の実施について
参加者（学校名）	<ul style="list-style-type: none"> ・熊野 孝 様（桐朋女子学園中学校・高等学校） ・西山 雄二 様（文京学院大学女子中学校 高等学校） ・林 和 様（湘南白百合学園中学高等学校） ・篠原 洋二 様（大妻中野中学校・高等学校） ・高橋 佳恵 様（大妻多摩中学高等学校） ・浅見 武 様（十文字中学・高等学校）
モデレータ/記録	JOES 教育相談員 奥田 修也 JOES 教育相談員 清水 賢司
<p><協議メモ></p> <p>1) 参加各校の先生より自己紹介</p> <p>2) オンライン入試の実施状況について質問。既にオンライン入試を取り入れている学校から具体的にどのような入試を行なっているか、個々にご説明いただいた後、質問を受けた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●既にオンライン入試を取り入れている学校：4校 ●今後取り入れるための情報を得たい学校：2校 <p>3) オンライン入試の内容</p> <p>学校によりアドミッションポリシーにかなりの違いがあるため、オンライン入試の形態にも違いが出ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●知識などの学力を問うことよりも、思考の過程がわかるような課題を提出し、口頭試問を行った学校（事前に課題を受験生に知らせておく学校もある）→2校 ●オンライン入試が始まった段階で、課題を見せて一定時間カメラの前で解答用紙に記入し試験終了後送信する方法をとる学校（英語と作文、又は英・数・国）→2校 <p>4) 実施にあたっての課題や問題点について</p> <ul style="list-style-type: none"> ●時差によるオンライン入試を実施する時間設定は？ →アジア圏では問題はないが、アメリカ大陸・欧州では同時間設定が難しい。 ●国・数・英の試験は、一般入試のようなスタイルでは実施が難しい。 →機器の調整などの必要もあり、事前にリハーサルを行っている。 ●コロナが終息した後も、オンライン入試を継続していくかどうか。 ●今後オンライン入試を拡大させた場合、同日中に採点までさばけなくなるのではないか。 ●基礎力重視のオンライン入試を行った場合、合格した生徒の入学後の伸びを精査する必要がある。 	

5) 今回の会議を通して

今回のテーマ内容では1時間持たないのではないかと心配をもとに会議に臨みましたが、1時間ではとても時間が足りないほど盛り上がりました。

特に、オンライン入試では「公平性の担保ができるか」という話題になり、海外で過ごした子供は、知識中心の評価から、子供のポテンシャルを重視した基準が重要ではないか。そのためには先生の意識改革が必要という意見が出されました。

参加したどの学校も、帰国子女に対して配慮をしていることが、参加された先生のお話を伺って良くわかりました。

オンライン入試未実施の2校の先生方から、いくつか質問もあり、自校の考え方を模索する際の示唆を得られたという感想もあったので、このグループの話し合いは参加各校のためになったと思います。

最後に、この会議をきっかけとして学校間の連携を強めていきたいという言葉で会議を終了しました。

以 上

テーマ	③-3 オンライン入試について
参加者(学校名)	<ul style="list-style-type: none"> ・齋藤 圭介 様（目白研心中学校高等学校） ・大淵 靖之 様（立命館慶祥中学校・高等学校） ・ウォーリング 里美 様（慶應義塾ニューヨーク学院） ・青井 静男 様（文化学園大学杉並中学・高等学校） ・安部川 雅子 様（玉川学園） ・山口 採 様（昭和女子大学附属昭和小学校）
モデレーター/記録	JOES 教育相談員 平 彰夫（モデレータ） JOES 教育相談員 三井 知之（記録）
<p><協議メモ></p> <p>最初に自己紹介を兼ねて、オンライン入試の概要について各校より発言いただいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン入試を実施。ただし、協会の方から「筆記試験は不可」というのことで、それに準じて帰国生入試を行った。方法は、受験生に動画を作成していただき、YouTubeに（外部に見られないよう公開限定で）アップロードしてもらっただけなので、当日受験生とはやり取りすることはない。本校が作成したマニュアルに沿って行っていただいた。動画の内容は「日本と海外との違いで学んだこと」「帰国したら何をやりたいか」というシンプルな質問を、5～10分程度で話してもらう。今年も内容を変更せずに実施した。 ・検討しているが、まだオンライン入試経験はない。例年、バンコクと東京で筆記試験＋面接の試験を行ってきた。タイではロックダウン等もあり、ギリギリまで悩んでいたが、つい先週、現地で試験を行うことができた。 ・年3回、オンライン入試を実施した。筆記試験は紙に書いていただくパターンと、ZOOMを使ってシェアの画面でそれを見て解いていただくパターンがあるのだが、こちらが思うように受験生の全体像が見えない。手元を映すようと伝えても、こちらが見たい部分が見えないこともある（＝カンニングの可能性も出てくる）。また、筆記試験も会場を受けていると、受験生一人一人のちょっとした特徴なども分かるが、オンラインの場合は平面のみで、面接では全体像が見えないという課題もある。このように、筆記試験・面接を受けるのと、オンラインとでは同じようには捉えられないという課題を感じている。 ・今年もオンライン入試を2回実施。アジア・オセアニアと欧米では時間帯が違うため、それぞれの時間帯で行った。「筆記試験は不可」ということだったので、口頭試問とカードを見せて、それに対して答えてもらう形で行った。また、海外在住の生徒については現地での成績を重要視し、現地で頑張っている生徒は、環境が変わっても頑張れるだろうと判断、プラス評価をしている。国内でも3回試験があるが、現地で取ってきた点数を加味している。 ・オンライン入試については、個別のローリング入試を実施。コロナ禍による帰国後の隔離期間は、特に中学生は通学できない期間が長くなってしまいうため、なるべく早く帰国して速やか入学していただけるよう、オンライン入試を何件か実施した。一斉入試ではないので、個別に、多くても3名くらいを同時に行う形でIBコースを基に実施した。 ・2年前から帰国生を随時受け入れており、帰国後に国・算・運動・面接を受けていただく。 	

この2年間で5名の帰国生を受け入れている。これまでオンライン入試は行っていない。

●オンライン入試の課題など

- 本校は学力試験を行わず、動画だけの判定となるため、逆に受験生側がそれだけで評価できるのか（私の良さが分かるのか？）と不安になるという反省点あり。今年度はオンライン説明会を通して目安をお伝えする等、少し分かり易くなるように修正した。一方で、本校側でも受け入れる立場として、少し思惑が違ったという感覚もあるにはあった。全員が満点とか、本校に合うか否かで判断したが、こちらの目も肥えていなくて、100パーセントではなかったと思う。ただし、本校に合っているなと感じた生徒の数の数の方が多かったので実施して良かったと思う。
- 筆記試験は英語・日本語・数学を実施。数学はオンライン（ZOOM）で受けていただくのだが、手元を一度映して、何も無いことを確認したうえで回答してもらう。さらに基本的に一人だけの部屋であるか、周辺も映してもらい数学の筆記試験を行った（それでもカンニングがないかと言うと課題が残るが）。また、英語と日本語は面接だけ行った。そのため、入学後に日本語力が思った以上に弱かったということがあった。
- 試験自体にそれほどトラブルは無かったが、アジアの一部の国で試験中にインターネットが何度も途切れることがあった。生徒が焦ってしまって可愛そうだった。また、時間になっても入室しないため、こちらから国際電話をかけて、生徒側が時間や日付を間違えていたということもあった。時差に関しては「日本時間の何時」と書いても、現地時間だと間違えるケースがあった。
- PCに慣れていない子、慣れていない子がいて、それが受験当日の心の動揺、会場に来て筆記試験を受けるのと少し状況が違う。当日の心の持ちようが受験生には難しいのではないかと感じる。本校でもオンライン（ZOOM）で筆記試験を実施する際には、まずは部屋全部や机の上も画面に映してもらい、不正がないかを確認してから紙に書く準備をしてもらう。問題を解いた後に写真を撮ってもらい、グーグルドライブでセキュリティーをかけて送信してもらうのだが、PCに慣れていない生徒はできるが、試験に集中する以外にも何か気を遣ってしまう点が難しい。また、本校でも時差の問題があり、日本の時間に合わせて実施しようとする、受験生側にとっては朝早い、夜遅いという時間帯になってしまうことがある。さらに、コミュニケーションという点で、PC画面一枚の壁はかなり大きい。対面ならば生徒の様子を見ながら引き出してあげるような問いかけもできるが、画面の向こうで生徒が本来の自分をアピールできたのか、というところも難しい。

●保護者への面接の有無

- 最初は生徒一人でZOOMの部屋に入って「受験生面接」、その後保護者にも入室いただき、「親子面接」を行う。父親が仕事で家にいない場合でも勤務先から参加されたケースもあり、これはオンラインの良いところでもあり、とても便利であった。
- 保護者面接の際に、回答に困った質問で画面を消されたり、フリーズしたようにみせて、ネット環境がよくないということを理由にしてごまかされたことがあった。信用問題に関わることだが、そういった対策も考える必要がある。

●オンライン入試のメリット

- コロナ禍の中でも試験ができたこと、わざわざ帰国しなくても、という点。
- 物理的な距離も縮まるので良い。海外ではまだ知名度がなかったが、一瞬で名前が一部の

国ではあるが広まったという実感がある。

●参考として

アメリカでは、あらゆる試験がやはりコロナ禍でできない、会場に集めてできなということになった時に、試験監督をオンラインでやりますというような業者がある。

最後に各校より本日の感想や意見を発言いただき、協議を終了した。

以 上

2021 年度 学校会員連絡協議会（オンライン開催） 分科会・グループ協議メモ

テーマ	⑤ コロナ禍による海外留学プログラムの代替対応、単位等について
参加者（学校名）	筒井 美帆 様（関東学院六浦中学校・高等学校） 中山 宗美 様（啓明学園） 高田 理尋 様（国際高等専門学校） 黒河 潤二 様（東洋大学附属姫路中学校・高等学校） 中山 光子 様（昭和女子大学附属昭和小学校）
モデレータ/記録	JOES 教育相談員 佐々 信行
<p><協議メモ></p> <p>各校の留学・交流プログラムの状況を報告。中止や変更を余儀なくされて苦労が多かったが、その中で少しでも効果を上げる方法やアイデアの交換ができた。</p> <p>【A校】</p> <ul style="list-style-type: none"> この2年間海外への旅行は中止。 新しく作ったクラスで1年間の留学を必須にしたが急遽カリキュラムを変更して対応。かろうじて、数名がカナダに留学できる見込みとなった。 <p>【B校】</p> <ul style="list-style-type: none"> カナダオンタリオ州の提携校への留学プログラムは停止中。カナダでは受け入れ可能になったようだが、送り出す側としてはまだ踏み切れない。 Round Square で以前から付き合いのある学校とオンラインで交流。 交換留学の相手校から打診があるが、まだ受け入れを再開するのは難しい。 <p>【C校】</p> <ul style="list-style-type: none"> 3年次は1年間ニュージーランドで学ぶことになっているが渡航できない。オンラインでニュージーランドの学校の授業を受け、実習は日本でネイティブ教員が実施。 ニュージーランド留学を期待して入学している生徒もいるので早く実現したい。 <p>【D校】</p> <ul style="list-style-type: none"> 中3のオーストラリア姉妹校での短期プログラムは、待機時期がなくなると実施できない。 高校生はカナダの提携校での課題解決型学習プログラムが2年連続で中止。来年度はなんとか実施したいと検討している。 <p>【E校】</p> <ul style="list-style-type: none"> 5、6年生はボストンへ11日間のフレンドシップツアーを予定していたが実施できず。代わりにオンラインでの交流イベントを実施。時差の調整に苦労した。 小学生のオンラインイベントには疑問の声があったが、それなりに楽しめた。 <p style="text-align: right;">以 上</p>	

テーマ	⑥ 入学生徒の日本語力と受け入れ後の指導について
参加者（学校名）	田中 守 様（関西学院千里国際中東部・高等部） 小林 啓太 様（関東学院六浦中学校・高等学校） 内藤 圭祐 様（名古屋国際中学校・高等学校） 和田 吉弘 様（十文字中学・高等学校）
モデレータ/記録	JOSE 教育相談員 中村 昌子
<p><協議メモ></p> <p>各校での帰国生徒の実態や日本語指導の実情についてそれぞれご説明いただいた後、日本語指導についての課題について協議した。</p> <p>日本語指導の実情と課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生で初めて日本語指導を受ける生徒には、「基礎国語」という教科を設けていたり個別補習をしたりと、学校ごとに対応しているが、教科学習の難しさの中で日本語の理解を高めていくことに課題がある。 ・もともと帰国生受入条件の中に「日本語で授業が受けられること」を条件にしている学校であっても、最近の傾向として日本語支援を必要とする生徒からの問い合わせが増えている。しかし、学校としての支援体制が整っていないのが実情。 ・IBのプログラムで英語の授業を実施していても、英語だけではなく日本語力を求められる部分もあり、教科ごとに日本語のフォローも必要となっている。 ・海外から外国籍の生徒を留学生としてではなく受け入れる制度を開始している学校では、外国人生徒への日本語指導の必要性も出てきている。 <p>相談員の所感</p> <p>日本語指導の方法として、取り出し授業、個別に支援員をつけるなどの方法を相談員も交えて紹介しあったが、なかなか実際の効果についてまで情報を交換することは難しかった。今後の方向として、学校全体として、日本語支援に取り組もうとしている学校もあり、実際に日本語支援を行っている学校の情報を得たいということが、参加者の希望であり、財団としても情報収集・提供に努めていくことをお伝えした。</p> <p>また、海外での日本語のサポート体制が少ない実情が保護者からも寄せられており、海外での日本語サポートを財団が行い、編入学にあたってその生徒の様子を学校に引き継げるようなシステムの構築を求めるとご意見もいただいた。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>	

2021 年度 学校会員連絡協議会（オンライン開催） 分科会・グループ協議メモ

テーマ	⑦ 帰国児童生徒への生徒指導の課題とその対応について
参加者（学校名）	<ul style="list-style-type: none"> ・佐藤 真樹 様（富士見中学校高等学校） ・田浦 武英 様（南山国際高等学校） ・笹部 純史 様（大阪府立箕面高等学校） ・岸 孝司 様（大阪国際大和田中学校高等学校）
モデレータ/記録	<p>JOES 教育相談員 植野 美穂</p> <p>JOES 教育相談員 橋本 芳登</p>
<p><協議メモ></p> <p>参加された各校から、帰国生徒受け入れ状況について報告していただいた後、テーマについて協議を行った。</p> <p>生徒指導の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒を受け入れてからまもない学校にとって、これからどのような点に注意をして生徒指導を行えばよいか ・海外で培ってきた帰国生の持つ良さを発揮するにはどうすればよいか ・本来の自分らしさを出せずに不適應や不登校を起こす帰国生にどのような指導の手立てが考えられるか <p>ということが挙げられた。それに対して、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・帰国生徒同士で話し合う交流会の実施 ・帰国生の疑問・発案により、学校の規則等について全校生徒で考える時間を設けた。 ・少人数クラスの設定 ・帰国生の成績評価への配慮 ・担任の先生と国際担当の先生との連携 <p>といった事例が参加者から挙げられた。</p> <p>今回の協議を受けて、JOES 教育相談員として、帰国生の指導では帰国生の声に耳を傾け、先生方のご自身の指導法を見直すことで学校を活性化させ、国際教育の推進にもつながることを伝えた。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>	

2021年度 学校会員連絡協議会（オンライン開催） 分科会・グループ協議メモ

テーマ	⑨-1 今後の海外駐在の動向と直近の編入学者数減への対応
参加者(学校名)	<ul style="list-style-type: none"> ・奥野 聡子 様（名古屋国際学園） ・綾部 香 様（十文字中学・高等学校） ・池田 礼子 様（自由学園） ・曾山 晃佑 様（玉川学園） ・倉持 宣良 様（国本女子中学校高等学校）
モデレータ/記録	JOES 教育相談員 友部 政勝
<p><協議メモ></p> <p>協議開始前に、自己紹介及び学校紹介を行い、各学校の様子や帰国子女受け入れ環境等について把握する。さらに、学校紹介の中でWディプロマについてのお話があり、それについて説明をしていただいた。</p> <p>1) 今後の海外駐在の動向</p> <p>参加校に情報及び意見を伺ったうえで、JOES相談員から今後の海外駐在の動向について簡単に説明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナウイルスにより、海外赴任が中止・延期となった2020年、2020年後半から海外赴任者の数は戻りつつある。 ・2021年1月以来、国外転出者は、1万人を超え、ほぼ回復傾向に向かっているが、ビザ取得に相当な時間を要したり、海外赴任を管理する人員不足等により、海外赴任者が日本に滞留している状態が続いている。 ・最近の教育相談の傾向として、就学前幼児の相談が増えている。全体の40%以上、就学前～高校生まで、帯同子女の多様化が進んでいると思われる。 <p>2) 編入学に関する問い合わせの現状</p> <p>A校：問い合わせは、コロナ前より若干増えているような気がする。内容については、実際に学校見学をすることが出来ないため、学校の雰囲気や子供たちの様子等、言葉ではなかなか説明できないことも含め、詳細なことを質問されます。</p> <p>B校：本校でも問い合わせは増えており、それも慌てたように連絡をしてくる。やはり、急遽帰国が決まったとか、コロナ拡大で帰国しようかどうか等、迷っているということで連絡してくる保護者が増えている。</p> <p>C校：本校でも若干増えていると思う。編入学試験についての問い合わせが例年より多いと思う。オンラインで編入学試験をやっていたらいいか等の問い合わせも多くなっている。</p> <p>3) 直近の編入学者数減への対応</p> <p>B校：（コロナ禍で）学校としては、できる限り柔軟に対応するよう心掛けている。保護者の不安や焦りをしっかりと受け止め、保護者が望むような方法（オンライン試験、日本人学校での試験、短期間で）をこれまで実施してきた。常に「緊急時」ということ</p>	

を意識して、保護者側の立場で考えるようにしている。

D校：帰国子女保護者だけではなく、一般の保護者にも本校の生徒の活動やグローバル化等への対応について広報活動及びコミュニケーションをしっかりととり、情報の輪を広げるPR活動に力をいれている。コロナの感染防止に万全を期し、安全・安心な学校づくりに努めている。

E校：保護者や帰国生の要望に応える学校づくりを目指している。帰国生が持ち帰った語学力、コミュニケーション力を更に伸ばす授業の工夫、遅れている部分の補填や海外体験を重視した指導に力を入れ、帰国生が安心して通える学校を目指している。

以 上

テーマ	⑨ 今後の海外駐在の動向と直近の編入学者数減への対応
参加者（学校名）	<ul style="list-style-type: none"> ・彦坂 のぼる 様（関西学院千里国際中等部高等部） ・岡田 美秀 様（東邦大学付属東邦中学校高等学校） ・北川 浩司 様（同志社国際中学校高等学校） ・中臺 昇一 様（筑波大学附属坂戸高等学校）
モデレータ/記録	JOES 教育相談員 菅原 光章
<p><協議メモ></p> <p>1) 参加者の自己紹介・学校紹介後、相談員より今後の海外駐在の動向について報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍が少し落ち着いてきて、各企業での海外派遣者は増えてきている。 ・大企業での駐在員現地化はみられるが、中小企業での海外派遣は増加する傾向等。 <p>2) 各校からの情報提供・ご意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外からの受験生が減っている学校がある一方で、昨年より受験生が増えている学校もある（学年によって編入学試験をストップ）。 ・コロナ禍が少し落ち着き、一時帰国して在籍していた生徒が現地に戻り始めている。しかし、そのまま学校に在籍している生徒も少なくない。 ・受験生は日本人学校や現地校と様々。それぞれ自分に合った学校を選択してほしい。 ・海外入試を行っていたがコロナ禍で実施できなくなった。帰国ができず入試を断念した生徒もいた。 ・帰国生入試において英語を特化していない（国内の生徒向け英語入試も実施）。 ・英語も日本語も中途半端な帰国生がいる。学習言語として母語の確立が大切。保護者は子どもを海外で学ばせるリスクも含めラーニングプランをたてていくことが必要。 <p>3) 今後の対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筆記試験、面談をオンライン入試で実施している学校があった。不正防止などの工夫は必要だが、オンライン入試は海外から受験生を増やす一つの方法になると考える。 <p>4) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両親のうちどちらかが日本国籍という帰国生が増えている。二重国籍の生徒への対応についてどうするか。また、帰国生の認定条件の課題（留学生か帰国生か、帰国しインター校に在籍していた生徒の扱い、等）。 <p>★1時間という限られた時間で、十分に各校の意見を吸い上げることができなかったことが残念。今回の協議会での出会いを良い機会として、参加校同士で情報交換を行うなど交流を深めてほしい。</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>	

2021年度 学校会員連絡協議会（オンライン開催） 分科会・グループ協議メモ

テーマ	⑩ 日本と海外両国における卒業資格の取得
参加者(学校名)	<ul style="list-style-type: none"> ・渡辺 由佳 様（わせがく高等学校） ・西田 真志 様（文化学園大学杉並中学・高等学校） ・山崎 達雄 様（英理女子学院高等学校） ・豊田 ひろ子 様（国本女子中学校高等学校） ・吉田 素一 様（国本女子中学校高等学校）
モデレータ/記録	JOES 教育相談員 後藤 彰夫
<p><協議メモ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダブルディプロマを実施している国内校は、現在20校ほどである。 ・各校からの自己紹介に引き続き、協議はダブルディプロマ未設置校から実施校への質疑応答が行われた。 ・参加4校のうち、2校ではダブルディプロマをすでに実施、他2校は未設置。 文化学園大学杉並中学・高等学校と、国本女子中学校高等学校では、国内（自校）での「対面」授業を中心にカリキュラムを編成し、ダブルディプロマ資格の獲得を目指す学校である。 ・他のタイプは、「留学」して現地授業・単位を取得するタイプと、「オンライン」により現地の学校の授業を受講し単位を取得するタイプである。 ・ダブルディプロマコースを学校（教職員）内、また他コースの生徒に認知・周知・理解してもらい、学校全体で取り組むことの大切さを説かれていた。 ・文化学園大学杉並中学・高等学校がカナダ・ブリティッシュコロンビア州、国本女子中学校高等学校がカナダ・アルバータ州の現地卒業資格の取得となるが、教員の派遣・雇用・身分等の仕組みが異なっていることなどを初めて知ることができた。 ・質問に対する回答や説明の中からは、「対面」授業を中心に行っている2校の並々ならぬご努力・ご苦労の様子を知ることができた。 <p style="text-align: right;">以 上</p>	